志村 恵「本の中のふたごたち」⑰

「トマトマ、ケチャケチャ、タップタップ」

ふたご姉妹の芸能人と聞いて誰を思い浮かべますか。こまどり姉妹やザ・ピーナッツ（今回の作品では、重要な役割を果たしています）なら僕と同年代以上の人ですね。アンパンマン世代は、やっぱりドリーミングでしょう。また、最近ではFLIP　FLAPがいます。もちろん、ドラマ「ふたりっ子」で国民的な人気を博した三倉茉奈・三倉佳奈も忘れてはなりません。

さて、今回紹介するのは、「トマトマ、ケチャケチャ、タップタップ」と、軽快な音楽とともにタップを踏む可愛いふたご姉妹の物語、野中柊の『小春日和』です。ひょんなことからテレビのトマト・ケチャップのＣＭに出演し、一躍人気者になってしまった小春、日和のふたご姉妹の物語です。

ふたごが生まれて驚くよりも、むしろ「能天気にはしゃぐ気持ちの方が強かった」両親によって、三月に生まれたのに「小春日和」と名付けられた「私」たち。「おい、おまえ小春日和っていうのは秋だぞ」「まあ。あなた本当に学がないわね」と父方の祖父母にあきれられながら、「私」の両親は可愛い名前だと、「小春」と「日和」、二人合わせて「小春日和」という名前を与えたのでした。

この物語は、ふたごの妹日和の視点から、つまり一貫して「私」の視点から描かれています。そして、彼女は姉のことを小春、小春ちゃんと呼んでいます。そんな二人を、母親はある日ダンス教室に連れて行きます。偶然教室の看板を見かけ、やらせてみたくなったからです。しかし、そこは単なるダンス教室やバレエ教室ではなく、タップダンスの教室でした。タップダンスが何物なのかも知らずに付いて行った二人は、先生が模範に踏んでみせたタップに魅了されます。高価なものにもかかわらず、決然とタップシューズを買い与えた母親の心意気に答えようかと思ったのか、二人は気合を入れてタップダンスを習い、みるみる上達し、ついにＣＭに出るほどになります。それは、それぞれミッキー・マウスとミニーに扮して初めて出た発表会で踊った「ミッキーマウス・マーチ」に対する、圧倒的ともいえる喝采が癖になってしまったからなのでしょうか。いずれにせよ、近所の評判のふたご姉妹から、日本中で超有名なふたご姉妹になるのです。

好評だったためクライエントも喜び、第二弾が作られ、二人はアイドル的存在になります。しかし、やがて二人は引き続いてＣＭに出演することを断ります。父親が賛成していなくて、そのことでどうやら夫婦関係にひびが入りかけていたこともその理由の一つでした。でもやはり、「芸能人」になることを二人が気持ちを一致させて望んでいたわけではなかったことが大きいと思います。小春の方は、積極的にさらにＣＭ出演したいようですが、日和の方はなんとなくいやな気がしていたのです。小春が、「あたしが教えてあげるよ。あのね、日和ちゃんは本当はＴＶに出たいんだよ」と言われても困るのです。それに、友達からサインを求められたり、世の中全てをＴＶの枠で見てしまうような気がして、なんだか生活の実体感がずれてしまったようなのです。そして、最初はスターになりたい気がしていた小春の方もしだいに面倒くさくなってきてしまって、結局それ以上ＴＶに出ないことに決めたのです。小春としても、日和と一緒でないと自分の「商品価値」がないことを知っていて、余り気持ちのない日和を巻き込みたくはなかったのです。

でも、この二人には純粋に踊りたい気持ちが潜んでいました。ですから、タップダンスの桜井先生に連れられて観た『パリの恋人』と『雨に唄えば』に感激した二人は、ミュージカルに出演したい気持ちを持ちます。自分たちの本当の気持ちが現われ始めたのです。残念ながらこの二人の夢がその後どうなったかは、この小説では物語られません。父親のインド赴任が決まったことで家庭に緊張が生じたから

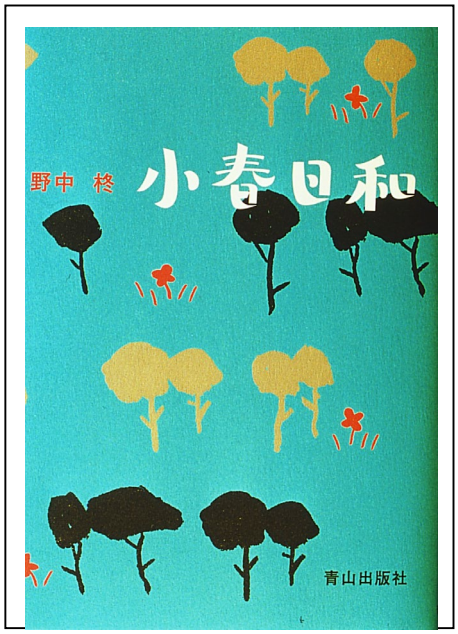
です。しかし、大切なのは結果がどうなったかということではなく、二人の中で気持ちを整理し、ある程度の結論めいたことを出せたことだと思います。結局、お父さんは単身でインドに渡っていきますが、日々の生活の中で元気を取り戻した母親も、まだ小さい弟の道太郎を連れてインドへと向かいます。残された小春と日和は、「この歳になってまた子供の面倒を見なくちゃならないの？これじゃあ何のためにババアになったんだかわかりゃしない」と嘆く祖母と暮らすことになります。

ところで、家庭分裂の危機に悩んだ小春と日和は、母方の祖母のボーイフレンド長沼さんや一度交通事故で死にかけたことのある吉田君（彼は、ドーベルマン犬に「ミケ」という名を付けている）など他者の視点によってずいぶん助けられます。ＴＶ出演の問題で悩んでいるときも、タップの桜井先生のアドヴァイスが大きな支えになります。多胎児と暮らす家族は、つい自分たちだけで「煮詰まった」感じになってしまいますが、こうした特に「ふんにゃり」「ぼんやり」した感じの友人や知人がいたらどれだけ助かることかと思います。

この小説は、大人になったふたごやふたごの保護者の方に読んでいただきたい作品です。特に、ちょっとレトロな感覚に浸りたい方には本当にお勧めの作品です。

僕も、特に落ち着いた豊かな気分のときには、なんとなくもう一人がすぐ近くにいる感じがするのですが、ふたごにとっての「気持ちのいい場所」にはもう一人の思い出がいつも付き添っているのでしょうか？

「あの歌（ザ･ピーナッツの『可愛い花』）は、私が大人になってからも、ときおり耳元で甦る。春が来て、夏が過ぎ、秋が訪れ、ふと冷たい風が吹き、どんなときも手を伸ばせば触れるところにあった、小春の小さな温かい手が、もはや私の傍らにはなくとも―あの歌が聞こえてくれば、そこにはいつだって明るい光が射しこみ、居心地のいい日溜まりができるのだ。」小説は、そう締めくくられています。



野中　柊：『小春日和』書影

野中　柊：『小春日和』青山出版社。

『ツインズ』42 号（ビネバル出版）から転載・修正